

「社会起業大学」

ソーシャルビジネスグランプリ 2012冬

財団のメンバーでもある社会起業大学(田中勇一理事長)による「ソーシャルビジネスグランプリ 2012冬」が、2月5日に開催された。田中理事長は冒頭挨拶で、「政治もマスコミもひどいが、私たちは私たち一人ひとりの手で、社会を変えていきたいと思います」と訴えた。

ファイナリスト6名の社会起業ブレゼンはいずれも熱く、500人近い観客の共感を得ていた。一方で多額の支援金が出る「en-japan大賞」は該当者なしとされ、事業性訴求の面では宿題ができた。

田坂広志氏(社会起業大学名誉学長/ソフィアバンク代表)、鶴岡秀子氏(ザ・レジエンド・ホテルズ&トラスト(株)代表取締役)による基調講演と、前回グランプリの新川政信氏(株)かい援隊本部代表取締役会長)による活動報告も行われた。

田坂氏は、ボランティア経済がネットを中心に急速に拡大し、マネタリー経済と融合しつつある点に触



田中勇一理事長



田坂広志氏



鶴岡秀子氏



新川政信氏



れ、利益追求と社会貢献が同意であった日本古来の企業観を、起業家は大切にしたいと訴えた。

泊まるだけで世界のために「伝説のホテル」提唱者の鶴岡氏は、構想だけで土地提供者や1800人の株主の共感を得ている。そのブレゼンを通して「共感資本を高める方法」の一端を披露。

新川氏は、介護と高齢者雇用を支える「かい援隊」の準備がほぼ整い、4月2日の事業開始を宣言した。

審査員特別賞



オホーツクECOタイムプロジェクト
オホーツクで雇用と「持続可能な海」を作る
●須藤悟(すどう さとる)さん

オホーツクの海岸に山積みされたホタテの貝殻を、消臭剤やペット用石けんとして資源化。漁業との共生と同時に雇用を創出する。母親の介護で地元に戻ることを考えた際、仕事の少なさに驚き、何とかしなければと自ら立ち上がった。事業の具体性を審査員が評価。

共感大賞



インド農村で雇用創出し、貧困解決!
●板倉沙織(いたくら さおり)さん

商社勤務でインドビジネスを経験。急発展の一方でゴミ山をあさる子どもたち。ODAやNGOの援助で貧困が減らないのは援助慣れのせいもあり雇用創出が不可欠と考える。4月からインドに移住して、日本企業誘致などの活動に入る。その決意と明るさに共感大。

グランプリ



大人のひきこもり オルタナティブ・ライフ・プログラム
●川初真吾(かわはつ しんご)さん

自身もADHDで苦しんだり15年間ひきこもっている身内の経験をふまえ、ひきこもりの人がボランティアや夜間のアウトソーシングなどで活躍する場を計画。ひきこもりは病んだ社会の「炭坑のカナリア」ではという視点と、温かみを感じる人柄にも共感が集った。

オルタナ賞



被災地で新しい生き方、働き方を創る!
～社会起業大学陸前高田校～
●三井俊介(みつい しゅんすけ)さん

3.11直後から復興支援団体SETを設立し、支援マッチングなど活動。被災地の広田町では人口流出と世代間コミュニケーション不足で町存続の危機にある。社会起業大学陸前高田校を設立し、外部の若者がまちづくりに参画できる仕組みを構築する。4月から移住。

心と体の健康ビジネス大賞



大学生×社会人で「何のために働くのか」を気楽に真剣に語り合う場【ハタモク】
●與良昌浩(よらまさひろ)さん

「何のために働いているのか」と35歳で人生の迷子になる人が多い。就活の前に働く目的を考える場として、大学生と社会人が語り合う場が必要と計画。授業として提供することで収益事業化を図る。親の会社をうまく継げなかった後悔も原動力に。命名も高評価。

心と体の健康ビジネス大賞



自分の足で最後まで 80歳になっても人より10倍楽しむ生活
●山本慎一(やまもと しんいち)さん

体が元気なら歳をとってもやりたいことができる。ほくなら80歳になったとき他の人よりモテたい。リハビリではなく、元気な人をさらに元気にするための個別訪問型トレーニングの山本メソッドを事業化。80代が元気でモテる人だらけの楽しい社会を目指す。